

アメリカの多文化主義の中の日系移民
—「揺れる」日系移民のナショナル・アイデンティティー—

Japanese Immigrants in Multicultural America:
The “Shaking” of National Identities

本多 善

Takumi HONDA

大阪経済法科大学 国際学部准教授

目次

はじめに

I. アメリカの多文化主義に登場する日系移民

II. ロナルド・タカキの歴史叙述とネーション・ステートの問題

III. 「揺れる」日系移民のナショナル・アイデンティティー

おわりに

キーワード：多文化主、日系移民、統合、ナショナル・アイデンティティー

はじめに

前回の講演で私は次のように申しました。「歴史を研究する前に、歴史家を研究してください。」今は、これに付け加えて、次のように申さねばなりません。「歴史家を研究する前に、歴史家の歴史のおよび社会的環境を研究してください。」歴史家は個人であると同時に歴史および社会の産物なのです¹。

本稿は、マジョリティーによるマイノリティーへの管理や同化について、アメリカの多文化主義に登場する日系移民から検証するものである。現在のアメリカにおける多文化社会を形成する一助となった多文化主義の議論が、アメリカ内部の多様性を承認しながら、同時に多様な民族を統合する装置として機能してきたことを日系移民の事例から明らかにする。アメリカでは多様性を承認するため、特に教育現場において、多文化主義という言葉が使用されるようになり、更に、多文化教育の中で、日系移民がモデルとして登場するようになる。しかしながら、多文化教育の中で語られる日系移民はアメリカに忠誠を示し、従順な国民として語られるようになる。この点に着目し、多文化主義の中で語られ

る日系移民がどのように表象されてきたのかについて言及する。日米の狭間で揺れるアイデンティティーの葛藤や困難という日系移民の経験が排除され、アメリカの多文化主義をめぐる歴史叙述において、マイノリティーによるマジョリティーへの同化＝「国民化」という文脈で語られてきたことを明らかにする。

二十世紀後半のアメリカで語られる多文化主義において、マイノリティーは国民と国家を前提としたナショナルな枠組みでのみ語られてきた。多文化主義の中で語られることがなかった20世紀におけるアメリカ社会を生き抜いてきた日系移民に着目する。

I. アメリカの多文化主義義に登場する日系移民

1. アメリカにおける多文化主義の登場

1980年代の後半に入ってアメリカでは新たな「多様性」の概念が議論されるようになった。多文化主義（multiculturalism）という概念が積極的に議論されるようになったのである。文化の「多様性」を尊重する多文化主義は、アメリカにおけるマジョリティーを中心とした従来の国民意識の変容を促そうとする試みから誕生する²。周知のとおり、アメリカ国内では奴隷制の歴史を有し、人種差別が現在も横行している。その根源は、社会背景における政治や歴史、文化において、アメリカの主流がヨーロッパ系文化を中心とするものであった。多文化主義が議論されるまでは、アメリカ内部において、マイノリティーに対する差別構造が併存していたのである。第二次世界大戦後、公民権運動や差別是正運動が市民によってもたらされた。さらに、多文化主義が注目され、こうした差別構造に対するアフリカ系やアジア系の差別是正運動に伴い、多様性を容認するための理念として注目されるようになった³。多文化主義はマイノリティーに属する民族や文化を包摂する多文化社会を目指し、多民族社会の新しい概念として多文化主義そのものが注目されるようになったのである。しかし多文化主義はマイノリティーの中のマイノリティーや、グループすら持たない人々の文化的な裂け目を、「多文化」という寛容性を帯びた言葉の中に融合していくという国民統合の理論として打ち出されるようになった⁴。

その後、1990年代に入るとさらに多文化主義が促進されるようになる。この概念は、現在でも広くアメリカ社会において歓迎され続け、教育機関においても多文化主義の議論が積極的に行われている⁵。特に高等教育においては多文化理解を進める教育の一環として、様々なルーツを持つ民族を積極的に取り上げ、様々な文化から成り立つアメリカとして現在でも展開されている⁶。

2. 多文化教育に登場する日系移民

なぜ多文化主義が周知され、大衆に受け入れられたのか。多文化主義の概念が広く受け

入れられた理由には国内の多様な文化の理解を目的とした教育が強く影響している。これは「多文化」、「多民族」というキーワードを扱った教育であるが、この教育のケース・スタディーとして日系移民が登場するのである。多文化主義を浸透させるための多文化教育として1990年以降アメリカの歴史教科書に、歴史的に抑圧され続けたアフリカ系アメリカ移民とマイノリティーであるアメリカの日系移民が記載されることとなったのである⁷。

森茂岳雄は「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」の中で、多文化教育が実践してきたモデルとしての日系移民を次のように指摘している。

（日系移民の）補償運動への勝利という歴史的出来事は、これら開発の進められている日系人学習の性格を大きく規定するものであった。すなわち補償運動への勝利がアメリカ人としての日系人のエスニック・アイデンティティの強化に強く作用したように、多文化教育としての日系人学習は、日系人という一エスニック集団の固有の経験を尊重しながら、それがすべてのアメリカ人が共有できる歴史的経験であるという認識に立って、国民統合を志向する多文化教育の一つの象徴的事例であるといってい⁸。

森茂は日系移民がアメリカにおける歴史教科書において語られてきた理由に「社会統合」と「共有できる歴史」を挙げている。日系移民を通して「共有できるもの」つまり「共感的理解」をアメリカ人が持つことによって、「アメリカ人としての国民意識」を強調していったのだ⁹。それではなぜアメリカにおいて日系移民が多文化主義の概念の中に組み込まれるようになったのか。

その理由は彼/彼女らのアイデンティティーがアメリカにあったとする一連の言説に由来する¹⁰。実際に日系移民を取り上げる歴史教科書は、日系移民が政府の不正義によって「強制収容」され、日系移民のアイデンティティーが喪失されたという歴史的出来事を取り上げてきた。そして戦後、彼/彼女らが立ち上がり政府に対して「強制収容」に対する補償運動を行い、それによって補償運動の勝利がもたらされたという日系移民の歴史を記載したのである。こうした日系移民の歴史はアメリカの歴史教科書のカリキュラムとして公式に位置づけられるようになった。このようにしてアメリカにおける多文化主義は、移民という存在を重視し、多文化主義の中で各々の歴史的ルーツや共存性を再確認することを、実際には多文化教育の中で可能とさせてきたのである。アメリカにおけるマイノリティーの歴史は、アメリカ社会全体の歴史の一部として語り直され、現在も「多様な民族の貢献」という文脈で語られている。

しかし多文化主義者らが生産する日系移民に関する歴史的言説は、強制収容が行われるまでの日系移民のアイデンティティーの葛藤と国民化されない人々を分析してこなかった。リベラルを主張する多文化主義者らは一部の日系二世がアメリカに対する忠誠を示してきたことを強調し、「国家への貢献」という善良な日系アメリカ人のモデルを生産してきたのである¹¹。強制収容の記憶から生じた彼/彼女らの経験は、多文化主義による統合

の理論の中で忘却されたのである。これによって日系移民に生じたアイデンティティーの揺れは、深く議論されないまま放置されてしまった。また多文化主義は日系移民に生じた自分がアメリカ人なのか、或いは日本人なのかといったアイデンティティーの葛藤を単なる過去の差別と偏見、そして政府の不正義という言葉で解決してしまったのである¹²。

今なお続くアメリカにおける移民排斥の動き（特に市民権を持たない不法移民と呼ばれる人々に対する）は強化され続けている。受け入れ社会が強化しようと試みるのは政府なりマジョリティー側に属するものによる統合であり、自らの社会的状況・利権に対する維持と拡張である。移民が受け入れ社会において何ら遜色がない場合、もしくは利害関係が一致する限り移民が承認される現状は、まさに移民排斥の構造そのものを強化する社会状況を再生産しているのである。

Ⅱ. ロナルド・タカキの歴史叙述とネーション・ステートの問題

1. 統合を目的とする多文化主義言説の登場

以上のようにアメリカの多文化主義は、マイノリティーの権利を容認する役割を果たしてきたが、その一方で特定のマイノリティー・モデルを形成してきた¹³。本章ではアメリカの多文化主義と日系移民の関係をより詳細に議論するために、実際にアメリカで論じられてきた多文化主義の言説から考察していく。そのテキストとしてタカキの多文化主義論を批判的に考察する¹⁴。統合を目的とする多文化主義言説について議論したタカキはリベラルな多文化国家を賛美する知識人であった¹⁵。彼は、アメリカ内部のマイノリティーがアメリカ社会において認知されていない現状を批判し、マイノリティーこそがアメリカのために貢献してきたことを主張した。

彼の主著 *A Different Mirror: A History of Multicultural America* は「認知を求める闘争」について説明した一冊である¹⁶。彼はアメリカの自由主義が崩壊していることを批判した上で、アメリカの歴史は多くのマイノリティーらの国家への貢献によって支えられていることを主張した。更にタカキは第二次世界大戦中にアメリカにおけるマイノリティー達が敵国とアメリカ内部の差別是正のために戦ったとする一連の歴史を叙述した¹⁷。

タカキは第二次世界大戦後のアメリカで語られてきた歴史に批判的視座をもっている。しかし、それらの歴史が司令官や白人兵士のヒロイズムを通して語られてきたことを非難しており、彼はそれとは異なる多文化主義の歴史を叙述するのである。それも底辺にいる一般大衆の声を拾い上げることによってアメリカ史の再構築を試みたのである。

第二次世界大戦に関する私たちの記憶は、アメリカ人としてのアイデンティティー私

私たちは何者であり、私たちの国はいかなるものか—を考える上で、今でも重要な枠組みの一つと言えよう。しかし、この過去をいったいどうやったら忘れずにいられるのだろうか。歴史とは個々人が自ら体験した出来事と、知識として学んだ出来事の記憶の総和である¹⁸。

彼は一般大衆の声が歴史において不在となっている現状を批判しながら、アメリカに忠誠を示した多くのマイノリティーの歴史は、従来のアメリカ史にはないと批判する。また

我が国の軍事的、政治的指導者たちの生き様を通して、あるいは白人（アングロ・サクソン）アメリカ人兵士による戦場での活躍や英雄行為、アフリカ系や日系といった米国者に独特な少数派の体験などを通して、戦争の歴史は語られ続けてきた¹⁹。

とした上で、「一般的なアメリカ人の実際の生活を通して、底辺から語られるものこそが歴史である²⁰」とし、「一般的なアメリカ人」を想定していたのである。彼は底辺といいながら、アメリカへの忠誠を示し兵役についた「一般的」なアジア系やアフリカ系アメリカ人を想定していた。タカキにとってアメリカの多文化主義に含まれる人々とは、多様なエスニシティー²¹が存在しつつも確固としたナショナリティーに根差しているものであった。彼の多文化主義にはアメリカ人としてのアイデンティティーが所与のものであって、そこに意義申し立てを行う人は存在しなかったのである。彼は答えありきの議論（それはナショナリティーの完全な一致であり、ほとんど全ての抑圧されてきたマイノリティーがアメリカに忠誠を示してきたこと）をしていたのである。

彼の著作に関して多文化主義は国民統合の新たな理念にほかならないとする研究者もいる²²。『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』は国民統合の理念が最も顕著に示されている彼の著作である。肌の色による差別を粉砕するために積極的にアメリカへの忠誠を示したオリジナル・アメリカンが登場し、硫黄島のインディアン・ヒーローが登場する。また、中国人、韓国系アメリカ人、インド、ドイツ、イタリア人等、彼/彼女らには差別による抑圧があったにも関わらず、第二次世界大戦において国外そして国内の差別のために兵士として戦ってきた史実を描いているのだ。

全世界から集まったアメリカ人は、海外と国内の偏見を打破するために戦い、血を流した。そんな彼らにとって戦争は「白人だけではなく、黄色も褐色も黒も、すべての人々のために民主主義を護る」戦いであった²³。

タカキの主張は、第二次世界大戦とは全てのアメリカ人が国内と国外の民主主義のために戦った正義の戦争であり、白人だけではなく、当時差別されていたマイノリティー達もアメリカのために戦ったことを記録することであった。タカキの歴史の語りは、多文化社会

のアメリカを再認識し、賞賛し、ナショナルな枠組みでの団結を強固にした。彼は次の歴史叙述の中に、アメリカとしての明白な団結を求めているのだ。

人種隔離、軍需産業の人種差別、都市の人種暴動で引き裂かれていた様々なコミュニティのアメリカ人たちは、それでも“より完全な団結”を求めて戦った。…アメリカの歴史の大転換期となったこの時代に、アメリカの“天使”は明白に多民族社会たることになった。“四つの自由”を海外だけでなく、我々の社会の現実にもするべく戦った多様な人々は、国内の“勝利”のために未完の戦いに従事する我々すべてを一つに“結びつける絆”を創造したのである²⁴。

彼のいう大転換期とは第二次世界大戦でアメリカが戦争に参戦したことである。そして、この時代においてアメリカ社会に団結が生まれたという。それは国内の差別されていた民族が、アメリカのために一致団結し、戦ったことを意味している。これによってアメリカは一つになり、より強固な国民国家が成立してきたことを彼は叙述しているのである。彼は全体としてすべてのマイノリティーがアメリカに忠誠を示してきたとする歴史を語った。それでは日系移民についてはどうだったのか。彼は日系移民についての記述も数多くしている。

2. アメリカの多文化史と日系移民の「貢献」

まず彼は20世紀後半に日本からアメリカに移住した日系移民の歴史を紹介し、そしてその後、1914年にカリフォルニアで制定された外国人土地法（すべての帰化不能外国人に一切の土地所有を禁止する法案）や、その後、移民一世に生まれた二世の子供たちを紹介している。ここでも問題となるのが、彼のナショナル・アイデンティティーに関する歴史の記載である。一例を挙げれば次のように一世と二世の関係を叙述している。

親たちは子供を通して、いつの日かアメリカに寛容の心を見出すことを願い、英語を話し、アメリカの学校教育を受けた第二世代が白人に日本文化を教え、移民世代の願望を伝えることを望んだ。つまり彼らを“仲介者”として、東を西に伝え、西を東に伝えることで、より大きな社会への“かけ橋”たらんことを願ったのである²⁵。

彼の論じる多文化史の中の日系移民史は、国民国家にとって健全なモデルとなった。一世がいかなる差別に遭遇しても、それでもアメリカ人として子供たちを育て、日本とアメリカの架け橋になってくれることを望んだとする歴史叙述である。しかし、実際にはそれよりも複雑な状況であった。第二次世界大戦中、彼/彼女らは強制収容所に収容されることとなるが、一世と二世の関係は必ずしも良好なものではなかった。日本人性を重んじる一

世とアメリカ人性を強調する二世との対立、或いは家族や日系コミュニティ間でアメリカに忠誠を示すグループと日本に忠誠を示すグループ、どちらにも示せないグループなど多様であった。市民権を持たない一世の母親が、自分の子供である二世がアメリカの兵士としてドラフトされることに悲痛な思いをした人も多い。こうした記憶は『私達の記録(Our Recollections)』にも残っている²⁶。このように一世が二世を東西の架け橋として、しかもアメリカ人として育てたと決定づけることは問題である。

「お前たちはアメリカ人だ」と、一世は子供たちにくどいほど言いつづけた。「お前たちは親にはなかった機会に恵まれているのだ。学校に行って、しっかり勉強しろ。機会は逃すな。」²⁷

一世が市民権を持つ子供に対して、チャンスが十分与えられていることが述べられている。しかし、このような一世ばかりではなかった²⁸。彼は更に、日系移民が日系アメリカ人としてのアイデンティティーをすでに持っており、彼/彼女らは日本民族ではあるけれどもアメリカ人としてのアイデンティティーを備えていたと記載している。

しかし二世は、完全な同化を、単に“アメリカ人”になりきることを欲していたわけではなかった。彼らは自分たちが二つの文化の複雑な結合体であることを意識し、そういう存在でありつづけたいと思っていた。アメリカ人に関して学校で学んだことはすべて彼らに根付き、アメリカ人としての意識は確かなものだった。にもかかわらず、多くの二世たちは親の文化を放棄することは望まなかった²⁹。

タカキは全ての日系二世はアメリカ人としての健全なナショナリティーを保持しながら、一方で自分のルーツを忘れることなく、心の奥深いところで日本文化を尊重していると考えていた。彼の描く多文化社会は属性としてのナショナリティーと定住国としてのナショナリティーを前提として展開されている。彼の多文化主義における議論は、国家に忠誠を示すマイノリティーを認知し、アメリカ人として対等に認めるべきとすることであった。ここでもまたナショナリティーの狭間で揺れる日系移民のアイデンティティーは無視され続けている。

彼は更に、日系移民と第二次世界大戦における兵役について叙述している。日系移民は第二次世界大戦において、何の罪もなく強制収容所に収容された。政府は彼/彼女らの中で市民権を持つ二世に注目し、二世に兵役につくかどうか忠誠心調査を実施した。そこで志願した人々は米兵として戦争に参加したのである。しかし実際には、アメリカ兵として志願することを拒んだ人々が多くいた³⁰。アメリカへの忠誠を示さず、日本に忠誠を示したものや、どちらに忠誠を示したらよいかわからなかったもの、日本に帰るためにあえてそうしたものもいた。しかしながら彼は日系兵士たちの活躍のみをアメリカ史の中で語っ

ている。

日系兵士たちはヨーロッパ戦線の勝利にも貢献した。1942年、西海岸でデウィット將軍が日系人の公正立ち退きを実行していた頃、ハワイではエモンズ將軍が二世部隊、第100大隊を編成していた³¹。

こうした語りは日系移民の国家への貢献のみを語り、歴史において語られない人々を排除してきた。社会の底辺に存在し、歴史にも登場することがなかった日系移民の中のマイノリティーはほとんど注目されなかったのである。アメリカのリベラル多文化主義の中で語られる日系移民は、アメリカへの忠誠という文脈においてのみ語られてきた。これらの考察から明らかとなるのは、多文化主義がマイノリティーを管理するために機能してきたことであった³²。

一見すると、アメリカにおける多文化主義はアメリカ国内の差別を解消し、すべてのアメリカ人に平等な権利を賦与することに貢献してきたといえる。しかし、アメリカにおける多文化主義は、文化的差異を承認することでアメリカ社会内部の分裂を招くということよりも、国民統合の理念として機能してきた³³。アメリカにおいて多文化主義を謳う歴史として挙げられるタカキらの多文化主義言説は、同一国民としての共通の記憶、共通の歴史認識、共通の帰属意識という幻想を構築してきたのである。

Ⅲ. 「揺れる」日系移民のナショナル・アイデンティティー

『リキッド化する世界の文化論』を著したポーランド出身の社会学者ジグムンド・バウマンは、私達の生きる社会の中で生産される文化（ここでは音楽やテレビに至る通俗的なもの）の流行について興味深い考察をしている。彼によれば現代における流行とは進歩であるという。しかし、その進歩とは生活の改善の言説から個人の生き残りの言説へとシフトしているという³⁴。近代における文化的な進歩とは命や生活に関わるものであったが、現在は歩調を合わせるものであるという。そこでは消費市場の巧妙な取り組みによって、文化が流行の論理に従うようになると指摘しているが、彼は同時に現代の人々は自分のアイデンティティーさえも、頻繁にそして素早く効率的に変化させる能力を身につけているという³⁵。

同様に藤田結子は、『文化移民：越境する日本の若者とメディア』の中で、「国境をこえるメディアはトランスナショナル・アイデンティティの形成を促す」という仮説について、特定の条件下においてはそうであるという³⁶。彼女はメディアという文化のツールを使用する利用者の個人的背景によっては、トランスナショナルなアイデンティティーが形成されやすいことを示唆している³⁷。このことは、文化やアイデンティティーなるものが流動的であることを意味している。しかし、加えるならば、これらの議論は決して近年の

事象ではない。過去、20世紀初頭にアメリカに移住した日系移民やその子孫らも当時の社会構造の中でどのようなアイデンティティーを選択すべきか、その時々的情勢によって適合させようと努力してきたことがわかる。それは必ずしも日米いずれかのアイデンティティーを選択するというものではなかった。

多文化主義の中で語られた日系移民のケースは、アメリカ内部における「強制収容」によるアイデンティティーの崩壊と、戦後の補償運動の勝利による日系アメリカ人としてのアイデンティティーの復活を強調するものであった。多文化教育の一環として日系移民を扱ったこれらの教材は、日系移民に関する複雑で重層的な文化の性質や差異、そしてアイデンティティーの問題を無視している。多文化教育においては、移住初期から強制収容までの彼/彼女らのアイデンティティーに注目しなかったのである。

この問題を明らかにするためには、日系移民に関する現在までの研究を考察していかなければならない。そして、そこから浮かび上がる周縁化された存在と社会に対する抵抗の運動をみていく必要がある。こうした一連の作業によってのみ日系移民を一つの規範として扱う多文化主義に対する批判的な視座が可能となるといえるであろう。

移住した初期の日本移民（一世）は、度重なる苦労の連続であった。日系移民への抑圧が繰り返されてきた歴史において、補償運動の勝利によってアメリカ人としてのアイデンティティーを取り戻せたという単純な多文化主義の理解では説明できないのである。なぜならば特に移住初期の1900年から1945年までのアイデンティティーの「揺れ」は想像を絶するものであり、現在のアメリカにおける多文化社会において「容認」されていても、彼/彼女らの複雑な経験と記憶を抹消することは不可能だからである³⁸。

日系移民のアイデンティティーの変容を大きく分けると、移住初期の1900年代から約1920年までの「日本人でいることが平気」だった時代、そして1920年代から約1930年までの「半分だけ日本人」の時代、そして1930年代以降「日本人かアメリカ人どちらかへの同一化」の時代に分けることができると坂口は指摘している³⁹。この約45年間、日系移民は日本とアメリカという二つの対立する国家の間で、自らのアイデンティティーを求め続けた。

この約45年間、二つの国家に忠誠を示すという選択は日系移民にとって一方では調和を保ちながら他方では矛盾と対立を生んできた。なぜならどちらに忠誠を示しても、国家の利害関係によって日系移民の社会構造が構築されてしまうからである。

一向に改善されない当時の日米関係にあっては、アメリカにとって移民の忠誠の行方など無意味なものであった。日系移民が日本に忠誠を示しても自らを日本民族と信じて、疎外されたアメリカにおける日系人社会の構造が日本政府によって改善されることは全くなかったし、アメリカに忠誠を示しても改善されることはなかったのである。その最終局面として日米開戦時における日系移民の「強制収容」が行われたのである。この約45年間における日系移民のアイデンティティーの変容は大変複雑なものである。日系移民のアイデンティティーの葛藤と国民国家による統合の圧力との矛盾は、アメリカ全土の日系

移民に対する暴力として顕在化していった⁴⁰。二つの国家の間に挟まれて、日系移民のアイデンティティーは確立されることなく常に二つの構造のもとで「揺れ」を感じながら独自のアイデンティティーを求め続けたのである。多文化主義における日系移民史の語りは、強制収容から補償運動に至るまでのアイデンティティーの変容に関する事例ばかりを取り上げてきた⁴¹。しかし移住初期のこの45年間は、強制収容や戦後の補償運動の時代よりも日系移民のアイデンティティーの葛藤が顕著な時期であったといえる。この時期のアメリカ社会は政治・経済・社会的抑圧の連続がその特徴であり、強制収容はその最終的帰結であったに過ぎない。

おわりに

多文化主義における日系移民の語りに注目すると、その語りは国家への貢献という形でマイノリティーが完全に統合されていることが理解できる。タカキのアメリカ史の記述において、アメリカの多文化主義に登場する日系移民が一方向的に語られ、アメリカ内部で統合されてきたといえる。

タカキの歴史言説や多文化主義の諸課題を示したのは、多文化主義言説に内在するネーションの概念自体が決して新しい概念ではなく、ネーションをより強固にするための新たな装置（代替装置）であったことを明らかにするためであった。善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史から排除されてきた日系移民が表象されることはなかったのである。本稿はアメリカの多文化主義言説の問題を明確にし、多文化主義言説に登場しない彼/彼女らのアイデンティティーに着目した。彼/彼女らのアイデンティティーが決してナショナルな網の目だけに絡み取られることなく、アメリカの多文化社会の中で存在しているのである。

参考文献

- 足立和歌子他『私達の記録（Our Recollections）』 湾東日系社会奉仕団、1986年
井上達夫「多文化主義の政治哲学－文化政治のトュリアーデ」油井大三郎、遠藤泰生編
『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』 東京大学出版
会、1999年
遠藤泰正「多文化主義とアメリカの過去－歴史の破壊と創造」油井大三郎、遠藤泰生編
『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』 東京大学出版
会、1999年
岡本智周『歴史教科書にみるアメリカ』 学文社、2008年
カー、E.H.（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』 岩波書店、1962年
坂口満宏『日本人アメリカ移民史』 不二出版、2001年

- 塩原良和「エスニック・マイノリティ向け社会政策における時間／場所の管理—オーストラリア先住民族政策の展開を事例に」『法学研究』86（7）、2013年
- 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1999年
- タカキ・ロナルド（安部紀子訳）『もう一つのアメリカン・ドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦』岩波書店、1996年
- タカキ・ロナルド（山岡洋一訳）『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』草思社、1995年
- タカキ、ロナルド（大和弘毅訳）『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』白艚舎、2004年
- 戸上宗賢『ジャパニーズ・アメリカン』ミネルヴァ書房、1986年
- バウマン、ジグムンド（伊藤茂訳）『リキッド化する世界の文化論』青土社、2014年
- 藤田結子『文化移民：越境する日本の若者とメディア』新曜社、2008年
- 森茂岳雄「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎・遠藤泰生編、『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会、1999年
- 森茂岳雄『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店、1999年
- 油井大三郎「いま、なぜ多文化主義論争なのか」、油井大三郎、遠藤泰生編、『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会、1999年
- 米山リサ『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』岩波書店、2003年
- Berghe, V.D., Pierre L. *Race and Racism: A Comparative Perspective*. New York: John Wiley & Sons, 1967
- Grodzins, M. *The Loyal and the Disloyal*. Chicago, University of Chicago Press, 1956
- Hollinger, D.A. *Postethnic America: Beyond Multiculturalism*. New York: Basicbooks, 1995
- Petersen, W. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House, 1971
- Takaki, R. *A Large Memory: A History of Our Diversity, with Voices*. New York: Little Brown and Company, 1998
- Takaki, R. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. New York: Little Brown and Company, 2008
- Tanaka, C. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc, 1982
- Uchida, Y. *Desert Exiles: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: University of Washington Press, 2015

註

- ¹ カー, E.H. (清水幾太郎訳) 『歴史とは何か』 岩波書店、1962年、61頁
- ² 井上達夫「多文化主義の政治哲学－文化政治のトュリアーデ」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会、1999年、88頁
- ³ 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1999年、38頁
- ⁴ 油井大三郎「いま、なぜ多文化主義論争なのか」、油井大三郎、遠藤泰生編、『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会、1999年
- ⁵ ホリンジャーは、多文化主義が国家の分裂を引き起こしていることを危惧し、全ての民族が文化的差異を超えて国家に帰属するべきであると述べた。
Hollinger, D.A. *Postethnic America: Beyond Multiculturalism*. New York: Basicbooks, 1995
- ⁶ Petersen, W. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House, 1971
- ⁷ 森茂岳雄「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎・遠藤泰生編、『多文化主義のアメリカ－揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会、1999年、pp.175-176
- ⁸ 同上、176頁
- ⁹ 同上、177頁
- ¹⁰ Tanaka, C. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc, 1982
- ¹¹ 森茂岳雄、前掲書、176頁
- ¹² 岡本智周『歴史教科書にみるアメリカ』学文社、2008年
- ¹³ 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1999年
- ¹⁴ 1939年生まれの日系三世。カリフォルニア大学バークレー校民族学研究学部教授で、アメリカ歴史学会の評議員を務めた。代表的な著書に『もう一つのアメリカン・ドリーム－アジア系アメリカ人の挑戦』岩波書店、1996年。『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』草思社、1995年がある。
- ¹⁵ 詳しくは以下を参照されたい。
Takaki, R. *A Large Memory: A History of Our Diversity, with Voices*. New York: Little Brown and Company, 1998
- ¹⁶ Takaki, R. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. New York: Little Brown and Company, 2008
- ¹⁷ タカキは著書の中で大戦中のアメリカ内部のマイノリティーに注目し、彼らの兵役に

- 焦点を当ててアメリカへの忠誠を誇張した。タカキ, ロナルド (大和弘毅訳) 『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』 白艚舎、2004年
- 18 同上、p.13
- 19 同上
- 20 同上
- 21 ファン・デン・バーグはエスニシティーと人種とは異なる意味をもった集団であると指摘する。バーグはエスニシティを「文化的基準にもとづき社会的に定義された集団」と定義し、人種を「身体的基準にもとづいて社会的に定義された集団」と定義する。エスニシティは言語や慣習、行動様式等の文化による集団として定義される。
- 一方人種は「身体的特徴」や「生物学的」要素にもとづいて定義された集団である。日系移民はアメリカ社会において、エスニック・マイノリティーであり、異なる人種として、「文化的」にも「生物学的」にも、区別されてきた。
- Berghe, V.D., Pierre L. *Race and Racism: A Comparative Perspective*. New York: John Wiley & Sons, 1967, pp.9-10
- 22 遠藤はタカキの歴史観と多文化主義について詳細な議論を展開している。遠藤泰正「多文化主義とアメリカの過去—歴史の破壊と創造」油井大三郎、遠藤泰生編、前掲書 pp.21-57
- 23 タカキ『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』 前掲書 p.335
- 24 同上 pp.335-336
- 25 同上 p.223
- 26 足立和歌子他『私達の記録 (Our Recollections)』 湾東日系社会奉仕団、1986年
- 27 タカキ『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』 前掲書 p.224
- 28 日系移民の歩みをアメリカへの忠誠という語りではなく、アメリカへの批判として描いたナラティブも多数存在する。代表的なものとして以下を紹介する。
- Uchida, Y. *Desert Exiles: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: University of Washington Press, 2015
- 29 タカキ『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』 前掲書 p.225
- 30 Grodzins, M. *The Loyal and the Disloyal*. Chicago, University of Chicago Press, 1956
- 31 タカキ『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』 前掲書、p.237
- 32 オーストラリアにおける多文化主義研究者の塩原良和も、多文化主義政策がマイノリティーである先住民族の管理として機能している点を指摘している。
- 塩原良和「エスニック・マイノリティ向け社会政策における時間／場所の管理—オー

ストラリア先住民族政策の展開を事例に」『法学研究』 86 (7)、2013年、pp.125-164

³³ 森茂岳雄 『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』 明石書店、1999年

³⁴ バウマン,ジグムンド (伊藤茂訳) 『リキッド化する世界の文化論』 青土社、2014年、
p.40

³⁵ 同上 p.41-42

³⁶ 藤田結子 『文化移民：越境する日本の若者とメディア』 新曜社、2008年、p.234

³⁷ 同上

³⁸ 坂口は、特に1930年代のアイデンティティーの葛藤について詳細に論じている。坂口
満宏 『日本人アメリカ移民史』 不二出版、2001年

³⁹ 同上、pp.17-42

⁴⁰ 戸上宗賢 『ジャパニーズ・アメリカン』 ミネルヴァ書房、1986年、p.319

⁴¹ 米山は、多文化主義における日系移民史の語りについて批判的考察を行っている。

米山リサ 『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』 岩波書店、2003年